



写真上：インドの結婚式体験の様様。
右の2名が筆者と筆者夫人、左側が同
友会会員でもある加藤英輔氏（カトー
レック 取締役社長）。
写真下：ムンバイ中央駅の外観。

インドのムンバイにて

森川 智
ヤマト科学 取締役社長

今年の2月に、YPO (Young Presidents' Organization) と同じ世界の社長で組織する団体が企画する「国際社長大学」に参加することとなり、インドのムンバイを訪問する機会を得た。5日間の期

間中は、午前・教育プログラム、午後・視察、夜・社交という基本プログラムであるが、2日目の夜に、参加者全員(約500名)でインドの結婚式を体験する企画が催され、女性はサリー、男性はク

ルタパジャマ

と頭にターバンという正装で参加した。

インド人の生活は儀式の日々と言っていいほど多くの祭り事・宗教的儀式がある。その中でも結婚式は最大のイベントで、単に人生の伴侶を得たことを祝う

だけでなく、地域社会に対し

て一族の富と繁栄を誇示する

イベントになっているようだ。

今回も本番さながらに野外競

馬場を貸し切りにし、豪華絢

爛な舞台設定で行われた。披

露宴では花婿が白馬に乗って

入場、有名な聖なる炎の周囲を7

回まわる儀式や、披露宴の最中に

何度もダンスの時間が設けられて

深夜まで踊りまくる…など、何と

も桁外れで賑やかな一夜の体験であ

った。

翌日、ムンバイ中央駅を視察し

た際に、頭の上の細長い台に弁当

箱をたくさんせた一団を見かけ

た。これが名物商売「ダツパー

ワラー(弁当配達業)」だ。混

雑を極める長距離電車通勤のオ

フィスワーカーのために、毎朝、

弁当箱を各家庭から集めて勤務先

へ届け、食べ終わった空の弁当箱

を回収する職業だが、従業員約5



私の思い出館
写真

000人、契約者数約20万人という巨大なビジネスで100年を超える歴史を有するという。集荷する人、列車で運ぶ人、駅から目的地まで運ぶ人など、分業による労働集約型ビジネスにもかかわらず、配達間違いは「600万回に1回」という驚異的な調査結果が報告されている。ダツパーワラーの多くの人は文字を読めず、文書による情報のやり取りもまったく行われない。このようなアナログ的な人的ネットワークによるシステムが、ハイテク技術を凌駕するパフォーマンスを長年維持していることに驚嘆させられた。